

特集 これからも皆さまとともに

# 市民と市政をつなぐ 架け橋として



\* 市報ロゴの移り変わり

市民生活に役に立つ身近な広報紙を目指して発行を重ね、今号で1707号となりました。

今回の特集では、今号からスタートした市報の全戸配布にあわせ、これまで掲載した記事や市民の皆様の声を、市の歴史とともに振り返ります。

歴代の市報ひたちは、記念・多賀・南部の3図書館で閲覧できますので、ぜひ利用ください。

いつも「市報ひたち」をご愛読いただき誠にありがとうございます。  
市報は、日立市が誕生した翌年の昭和15年7月15日に創刊し、以来81年間、市民の皆さまの暮らしとともに歩み続けてきました。  
市報は、市のサービスをもれなくご利用していただくため、日々の生活に役立つ情報をお伝えするとともに、地域の活動や市民の皆さまの活躍を紹介し、広く知っていただくための広報紙です。また、その時々情報が集約された市報は、市の歴史や出来事を振り返る貴重な記録誌にもなるものと考えております。  
昨今のインターネットの普及により情報量が飛躍的に増加する中、市報は、



日立市長  
小川 春樹

市民の皆さまに伝えるべき情報、市民の皆さまが必要としている情報を厳選して確実に伝えるとともに、取材や制作を通して、市民と市政をつなぐ「架け橋」としても重要な役割を担っています。  
その市報を地域の学区コミュニティや事業者の方々との協働により、今号から全てのご家庭にお届けできるようになりました。

今後も、一人でも多くの方が手にとって読んでくださるよう、市民の皆さまの声を傾けながら分かりやすい紙面づくりに磨きをかけ、市民生活に役立ち、そして愛される市報となることを目指してまいります。

# 1

昭和15年 日立市報第1号（創刊号）を発行

記念すべき第1号（昭和15年7月15日発行）は、日立市報として市制施行から約1年後に発行しました。

紙面には、初代日立市長に就任した福田重清市長や皆川清議長の新刊に寄せたあいさつなどを掲載しています。



# 2

昭和24年 日立市報復刊第1号を発行

戦争の影響により、昭和19年から休刊していた日立市報が、5年ぶりに復刊しました。

紙面には、高嶋秀吉市長や沼田敬之議長の市報復刊に対する思いを掲載しています。



# 3

昭和49年 茨城国体「水と緑のまごころ国体」を開催

茨城国体の開催に当たり、4ページにわたる特集号を発行しました。日立市からは168人の選手が代表として参加し、競技で大きな盛り上がりを見せた他、市民が協力して他県などからきた選手や観客にまごころをこめた応対を行い、大成功で幕を閉じました。



日立市のコミュニティ活動は、「自分の地域は自分の創意と努力でつくり上げる」という理念のもと始まりました。市報では、地域活動に取り組む様子などがシリーズで紹介されています。

今後、住みよいまちづくりのためにコミュニティ活動が果たす役割はますます重要になってくると考えています。これからも市報やコミュニティが作成する広報紙などを通じて、より多くの人々がコミュニティ活動を知って、そして、参加してくれることを願っています。



日立市コミュニティ推進協議会  
会長 泉 聡二さん

## 日立市の歩み

- 1939年（昭和14年）日立町と助川町が合併し、日立市が誕生
- 1940年（昭和15年）日立市報第1号（創刊号）を発行（一）
- 1944年（昭和19年）日立市報第42号を発行し、その後戦争の影響により休刊
- 1945年（昭和20年）太平洋戦争の戦災により、市街地の広範が焼失
- 1949年（昭和24年）戦争後、日立市報復刊第1号を発行（二）
- 1951年（昭和26年）平和通りが開通し、街路樹に桜を植樹
- 1955年（昭和30年）多賀町、日高村、久慈町、中里村、坂本村、東小沢村が編入合併
- 1956年（昭和31年）豊浦町が編入合併
- 1957年（昭和32年）かみね動物園がオープン
- 1959年（昭和34年）日立港が開港（現在の茨城港日立港区）
- 1965年（昭和40年）群馬県桐生市と国内親善都市を提携
- 1974年（昭和49年）茨城国体「水と緑のまごころ国体」を開催（三）
- ★国体を契機に市民運動が始まる（翌年、日立市民運動推進連絡協議会が発足（日立市のコミュニティ活動の出发点）

6

平成5年 大煙突が3分の1を残して倒壊



日立市のシンボルでもある大煙突が、平成5年2月19日に突然、およそ3分の1を残して倒壊し、市民に衝撃を与えました。

当時、市民の中には大煙突の倒壊に驚き、涙を流し、意気消沈した人もいたと言います。そのような思いが市報で語られています。

折れてもなお、まちの成り立ちを語る上で欠かすことのできない日立市のシンボルとなっています。



4

昭和50年 新小学1年生に市オリジナルランドセルの贈呈開始

各家庭の経済的負担を軽減し、すべての新1年生が同じスタートラインに立てるように、入学のお祝いとして全国初となるランドセルの贈呈が始まり、市報で紹介しています。この年、約4,100人の新1年生にランドセルをプレゼントしました。



5

平成2年 日立シビックセンターがオープン

昭和63年から建設を進めてきていた日立シビックセンターと新都市広場がオープンし、写真で紹介しています。現在も市民の憩いの場やイベントの場などさまざまな場面で活用されています。



中学生のころ、自分と同世代の方が市の事業や魅力を紹介する子ども通信員の記事を読むのが楽しみでした。そんな時、先生から「子ども通信員に出てみない？」と言われたときは、とても嬉しかったのを覚えています。

私が通信員として掲載された市報を見た友人や近所の方など多くの方に「市報に出ていたね！」と言われ、市報の影響の大きさを実感しました。また、特に家族は嬉しかったようで、周囲にたくさん宣伝していました。

これからも子ども通信員をはじめ、市報を読むのを楽しみにしています。



平成18年の子ども通信員  
石貝 楓さん

- 1975年  
(昭和50年)  
新小学1年生に市オリジナルランドセルの贈呈開始(4)
- 1977年  
(昭和52年)  
市の花「サクラ」、市の木「ケヤキ」を制定
- 1980年  
(昭和55年)  
★市報で「子ども通信員」コーナーを開始
- 1981年  
(昭和56年)  
市民運動組織による市報の配布を開始
- 1982年  
(昭和57年)  
アメリカ合衆国アラバマ州バーミングハム市と国際親善姉妹都市を提携
- 1985年  
(昭和60年)  
常磐自動車道が日立北インターチェンジまで開通
- 1988年  
(昭和63年)  
ニュージールランド・タウランガ市と国際親善姉妹都市を提携
- 1989年  
(平成元年)  
市制施行50周年  
市の鳥「ウミウ」を制定
- 1990年  
(平成2年)  
日立シビックセンターがオープン(5)  
日本のさくら名所100選に「かみね公園・平和通り」が認定
- 1991年  
(平成3年)  
助川町の山林火災で、約217haの林野が焼失
- 1993年  
(平成5年)  
大煙突が3分の1を残して倒壊(6)
- 2001年  
(平成13年)  
国道6号日立バイパスが開通  
市報の紙面サイズを変更(タブロイド版からA4版)
- 2003年  
(平成15年)  
市のさかな「さくらダコ」を制定

# 9

平成 30 年 市報が全ページフルカラー化

平成 30 年 4 月 5 日号から全ページフルカラーになりました。写真やイラストを大きく使用することが可能となり、よりレイアウトの自由度が増し、インパクトのある紙面の作成できるようになりました。



# 10

令和元年 市制施行 80 周年

市制施行 80 周年について紹介しました。記念式典では、市の発展に寄与した功労者の表彰や「ふるさと日立大使」の委嘱式など盛大に行いました。また、各種記念事業を通じて、市制施行 80 周年の節目を祝いました。



日立市は、妊娠が分かった時から、子どもが大学などを卒業するまでの切れ目のない子育て支援が、とても充実しています。我が家は今年、次女が入学してランドセルをいただき、とても喜んでいました。

子どもが小さい時は、子育て広場などに通ったり、最近は動物園やサクリエなどに行ったりと、子どもが楽しめる遊び場がいっぱい！

市報には、子どものイベントや支援制度、相談窓口などの情報が掲載されているので、とても助かっています。



ホンすご第1弾に出演  
美穂ママ親子

# 7

平成 16 年 日立市と十王町が合併

日本有数の鉱工業都市として発展してきた日立市と、白砂青松の美しい海岸など豊かな自然環境を持つ十王町が平成 16 年 11 月に合併しました。新・日立市の思いや合併までの道りを掲載しています。



# 8

平成 23 年 東日本大震災

平成 23 年 3 月 11 日 午後 2 時 46 分頃、東日本大震災が発生しました。日立市でも震度 6 強の地震を観測し、沿岸部では津波により家屋が損壊するなどの大きな被害を受けたことを、写真で伝えています。



2021年  
(令和3年)

東京オリンピックで、日立市は12人のランナーが聖火を繋ぐ

2020年  
(令和2年)

新型コロナウイルス感染症の影響を受ける  
新中学1年生にスクールカバンの贈呈開始

2019年  
(令和元年)

茨城国体「いきいき茨城ゆめ国体」を開催  
新交通（ひたちBRT）第II期区間本格運行開始

2018年  
(平成30年)

JR大甕駅自由通路・新駅舎がオープン

2017年  
(平成29年)

日立市池の川さくらアリーナ、市役所新庁舎がオープン

2011年  
(平成23年)

東日本大震災により、海岸部を中心に市全域で大きな被害を受ける(8)  
JR日立駅自由通路・橋上駅舎がオープン

2009年  
(平成21年)

「日立風流物」がユネスコ無形文化遺産に登録

2005年  
(平成17年)

ケーブルテレビによる行政放送番組試験放送がスタート

2004年  
(平成16年)

日立市と十王町が合併(7)  
山形県山辺町と国内友好都市を提携

# 制作の舞台裏 市報の発行まで



広報戦略課では、市民の皆さまに、その時々々の旬の話題や主要事業などの情報を正確かつ迅速にお届けするため、編集会議や各事業課との打ち合わせを重ねて毎号、掲載内容を決めています。掲載内容が決まったら、職員自らが手分けして、取材、写真撮影、レイアウトなどを行い、パソコンの専用ソフトで編集した上で、データを印刷業者に渡します。印刷後、お届けするための準備工程を経て、各家庭へ配布されます。市報発行は、多くの皆さまの協力によって、支えられています。



## 1 編集会議

特集記事や表紙を決めたり、掲載する記事を整理します。



## 7 配布

各配布員がポスティングなどにより市内全世帯に配布します。

## 取材

## 2



担当課と調整して、広報戦略課の職員が地域に出向き、写真撮影やインタビューを行います。

## 梱包作業

学区コミュニティの梱包員や配布業者が、各配布員ごとに仕分けし、梱包します。



## 6



## 4 校正

文章の内容や誤字・脱字が無いかを、入念にチェックします。

## 制作

## 3

写真やイラストなどを活用して、レイアウト作業を行います。



## 印刷製本

## 5

印刷業者に原稿データを送付し、色味などを確認の上、印刷します。



## デジタルでも配信

市報をホームページで公開している他、日立市公式SNSなどで私たちの魅力を発信しています。また、外国語の翻訳を行うアプリ「カタログポケット」でも配信しています。

日立市報  
電子版  
(カタログポケット)



## 日立市 公式 SNS



フェイスブック



ツイッター



インスタグラム

動画でも市政  
情報を発信し  
ています！



ユーチューブ



## すべての方に市報をお届け 点字や声で伝える市報

全ての方に市報の情報をお届けするためには、ボランティアの方々の協力が欠かせません。視覚や聴覚の障害に関わらず、誰もが市報を通して情報を得ることができるとともに、点字市報や声の市報を、希望者に送付しています。制作を担っているボランティアの皆さんを紹介いたします。



録音の様子



点字市報



日立リーディングサービスグループ



日立点訳友の会

私たちは、視覚障害のある方や見えにくく困っている方の「知りたい!」という願いに応えるため、広報紙、雑誌、単行本などの録音をしています。声の市報は、会の結成初期からの主要な活動です。

読み方のルールを決めて、毎号変わった読み方にならないようにするとともに、聴いている方が「こんな紙面になっているんだ」と感じられるように、文字はもちろん写真についても、丁寧かつ正確な読みを心掛けています。声の市報は、市のHPからもご利用できますので、ぜひ聴いていただければと思います。

視覚障害のある方が知りたい情報を少しでもお届けできればと思い活動しています。私たちは、市報の他、カレンダーや時刻表、小説などの点訳も行っており、中には、定年後に地域社会に何らかの形で貢献や恩返しをしたいという思いで、点字を独学で勉強して始めた方もいます。

市報を点訳する上で、間違いがないよう会員同士で読み合わせを行うなど、記事を正確に点訳することに努めています。私たちの小さなお手伝いが、どこかで誰かのお役に立てばうれしいです。

これからの市報は、市政の情報を発信することはもちろんのこと、そうした方々の笑顔や声をより多くお届けし、もっと身近で、もっと気軽に手に取ってもらえるような市報にしていきたいと考えています。そして、市報から発信された声が、更なるつながりを生み、その輪が広がっていく。そんな願いを込めて、皆さんとともに市報を作り上げていけるようにがんばります!

地域には、企業等で働く方、コミュニティや団体で活動する方など、さまざまな場所や場面で活躍しているたくさんの方がいます。

市報担当者が語る

## これからの市報

